

# 懷徳堂 『左九羅帖』

## ●左九羅帖(さくらじょう)

動植物・鉱物などを、主として医薬の観点から研究する学問は、中国では本草学(ほんぞうがく)と呼ばれていました。日本に伝来した本草学は、広く動植物に関わる博物学として、本草書(動植物図鑑)を誕生させていきます。中井履軒(なかいりけん)の『左九羅帖』は、懷徳堂の代表的な本草書です。

履軒は、動植物図をわかりやすく描き、そのかたわらに名称を記しています。筆致は極めて写実的で、履軒の本草への関心を伝える資料であるとともに、履軒の画才を窺わせる資料ともなっています。ただし、画は別人の筆によるという説もあります。(『左九羅帖』1帖、外形寸法は縦28.5cm×横17.1cm。)

このコンテンツでは、『左九羅帖』の全ページを実際にめくるようにして閲覧できます。また、細部の拡大や自動再生も可能です。『左九羅帖』の美の世界をご覧ください。

扶桑

サクラと樺

樺 青鳥

左九羅帖

動植物・鉱物などを、主として医薬の観点から研究する学問は、中国では本草学(ほんぞうがく)と呼ばれていました。日本に伝来した本草学は、広く動植物に関わる博物学として、本草書(動植物図鑑)を誕生させていきます。中井履軒(なかいりけん)の『左九羅帖』は、懷徳堂の代表的な本草書です。

履軒は、動植物図をわかりやすく描き、そのかたわらに名称を記しています。筆致は極めて写実的で、履軒の本草への関心を伝える資料であるとともに、履軒の画才を窺わせる資料ともなっています。ただし、画は別人の筆によるという説もあります。

1帖、外形寸法は縦28.5cm×横17.1cm。

サクラと樺

扶桑

閲覧する

拡大

ページ送り

インデックスから見るには

自動再生

ヘルプ選択

印刷選択

# 懐徳堂『左九羅帖』

## ●サクラと樺

履軒は、動植物の名称が混乱しているのを憂え、これを正すために『左九羅帖』を著したと考えられます。たとえば本資料の冒頭には、サクラおよびウグイスが描かれており、そのかたわらには「樺」および「青鳥」と記されています。日本で「サクラ」には「桜」字をあてるのが一般的であり、また、履軒の兄の中井竹山は「桜」ではなく「海棠」の字をあてるべきだとしています。これに対して履軒は、「樺」が正しいとしています。

なお、懐徳堂最後の教授並河寒泉（なみかわかんせん）が晩年「桜ノ宮」に住み「樺翁」と号したのも、従祖父である履軒の説に基づくと考えられます。

## ●扶桑（ふそう）

「扶桑」とは日本の別名です。その昔、本邦の西国に「扶桑木（ふそうぼく）」と称する大木があり、外国の船がはるかにこの扶桑を認めて、日本の目当てとしたことから日本を「扶桑国」と言った、という俗説があります。また、中国のある字説に、太陽が木の下にあるのを「杳（ヨウ、くらい）」、木中に昇るのを「東」、木の上にあるのを「杲（コウ、あかるい）」とし、そこで言われる木は中国の東方の島（日本）にある「扶桑」であるとしています。

『左九羅帖』では、終わりの方に「扶桑木」の項があり、巨大な木の根元に米粒ほどの人々が描かれています。

なお、履軒の兄の中井竹山（なかいちくざん）は、扶桑の字説を俗説とはしながらも、上古の日本に巨木があったことは事実であるとして、巨木伝説を紹介して考証した『扶桑木説（ふそうぼくせつ）』という本を書いています。

